



多様な選択肢がある 社会こそ、真の男女共同 参画社会になる

女性の登用が少ないことをどこに訴えればいいのでしょうか。例えばオランダの企業には、女性社員が自主的に組織している会があって、その会を通じて経営者に直接話をし、提言することで、具体的に社風を変えていった実例があります。日本でも、女性の登用や活用の制度があっても、その制度が活用されていないのでは意味がないと思います。育児休暇ひとつを例にとっても、休暇をとることが問題ではなく、代替要員の確保をしていくなど、企業側が柔軟に対応することが、結果的に組織にプ

ラスになると思います。勤務している大学の学生達を「仕事重視」、「家庭重視」、「仕事も家庭も重視」という3つのグループに分けると「仕事も家庭も大切にしたい」が一番多いです。しかし、このグループは「仕事重視」、「家庭重視」のどちらにも動きやすい層です。こういう層を活用する

ためには、多様な生き方や働き方ができる社会の仕組みが必要になります。理想は、仕事を選ぶか、家庭を選ぶかという二者択一ではない社会の実現です。いま日本は過渡期で、女性のほうが一歩早く多様な生き方を始めているのに、日本の社会のほうですこし遅れているように見受けられます。

日本の産業界、労働業界は、団塊の世代の引退による労働力不足が深刻化する「2007年問題」を抱えています。単なる数の不足以上に、質的な人材の不足が問題です。労働市場全体が影響を受けますから、終身雇用も崩れていくでしょう。こういうときにこそ、家庭を大事にしながらかける仕組みができればいいと思います。そのためにも、女性の側から、こう

いう働き方をしたいと企業や社会に提言していくことが必要です。「2007年問題」は、ある意味で女性にとってチャンスかもしれない。いろいろな可能性が出てくるでしょう。そうした事例を積み重ねていくことで、多様な生き方ができる社会に近づいていくことになると思います。企業の側も業績を上げるために女性活用に積極的になるでしょうから、その

とき女性にとって追い風が吹く可能性が高いので、この機会を見逃さず、女性の側も実力を付けていくことが大切です。自分にはそんな力がないと思いがちですが、一歩でも半歩でも踏み出していくことが重要です。男女を問わず多様な生き方、多様な選択肢がある社会になっていくために、自分ができることから始めてみてください。

COLUMN 3

自ら動かなければ、何も解決しない!

映画「エリン・プロコビッチ」は、企業の水質汚染に関する訴訟で全米史上最高額の和解金を勝ち取った女性の実話です。

主人公のエリン・プロコビッチは3人の子供がいるシングル・マザー。お金も仕事もない彼女は、交通事故で知り合った弁護士の事務所押し掛け、強引に事務職に就く。そして、ある書類に不審を抱いたことがきっかけで、大企業の水質汚染を突きとめ、住民を説得し集団訴訟を起こす。なにごとにも情熱を持って取り組む。決してあきらめない。自ら動かなければ、何も解決しない。彼女は様々なことを私たちに教えてくれます。さあ、まず手をあげてみましょう!



主演のジュリア・ロバーツは、本作で2000年のアカデミー主演女優賞を受賞。
©2000 COLUMBIA PICTURES INDUSTRIES, INC. & ©2000 UNIVERSAL STUDIOS. ALL RIGHTS RESERVED.

「特集 政策・方針決定過程への男女共同参画」を考える

通信員テーブル
通信員が今回の特集テーマについて考えたこと、感じたことなどを、自身の体験も踏まえながら話し合いました。



出席者 左から
堀鈴子さん
熊谷照子さん
福地一夫さん
石川めぐみさん

福地 私は地域の活動に多く参加していますが、私の周辺を見る限り、女性たちは意欲があっても周りに気を配りすぎて、外に飛び出すのをためらっている人が多くいます。家族や周囲の人を説得して、自分から外に出て行くことが必要です。

いいかを考えています。女性のリーダーをどうやって出すかよりは、出てきたときにどう受け止めてあげるか、その環境を作ることのほうが重要だと思っています。

熊谷 身近なことだと真剣に考えられるのですが、市や国のことはとても遠く感じられます。相手が大きいと、自分に何ができるのかわからず、考えてしまい、何もできない。具体的な考えは浮かばないのですが、そのあたりをどう打開していくのが重要ですね。

石川 私の体験ですが、子どもの幼稚園の夏祭りの実行委員長を自分から手を上げ

て引き受けました。夏祭りそのものの成功はもちろんですけど、自分自身、協調や信頼を学び、母親としても、人間としても自信を付けることができたことが最大の収穫でした。

堀 多くの女性は何かしたと思うのですが、きっかけがつかめないのだと思います。私の場合も、子どもの高校卒業の謝恩会の司会を頼まれたとき、勇気を出して引き受けて成功させたことが、自分への自信につながりました。そのときは背を押された側でしたが、これからは誰かが何かをする時に、手をさしのべる側になりたいと思

っています。
熊谷 夫ができることは妻もできるよ、妻ができることは夫もできるよ、お互いに同じことができるよ、互いに訓練するよ、学んでいく必要があるよ、学んではいけないよ、妻のほうも難しいことは分らないよ、済ませないよ、夫も生きていくのに必要な料理くらいは覚える。そうお互いに意識していくことが大切だと思っています。
福地 経済が右肩上がりだった頃は、合理化が大事で、どちらか一人が家のことをできればよかったです。今は二人でできたほうが、二人の時間を大切にできていいですね。
石川 女性がリーダーになつていくこと以上に、男だから女だからではなく、人として生きていく上で必要なことを学び、手を上げていく。子どもたちにもそう教えてい